

## 戦跡めぐりで入西に

さる10月16日に開催された当会主催の「坂戸の戦跡めぐり」に参加しました。案内役の大久保さんは、35年に渡って調査し70以上の戦跡を見つけたとのこと。その知識の深さ、正確さに感銘を受けました。

戦跡めぐりの出発前に事前説明がありました。坂戸・鶴ヶ島・日高・川越といった広大な地域が紙切れ1枚で軍に接收された実態、機体の軽量化が原因の空中分解による墜落等の人命軽視、アメリカは航空写真をもとに空爆していたのに対し、日本はどこに到達するかもわからない風船爆弾をあてにする等、いかに情報不足で、かつ無謀な戦争であったのか等が具体的にわかりました。

戦跡めぐりでは、整備兵の駐屯や整備機材と燃料が保管されていた入西地域を車3台で回りましたが、10数年間通っていた入西にこれだけ多くの戦跡があったこと、普段それらの前を通るだけで、戦跡としての重みを全く理解していなかったことを知りました。

また軍事機密ということで、入西に何世代にも渡って住んでおられる方々のほとんどが、どういった軍事施設が置かれたかを知らされず、知っておられた方々も高齢化でほとんど残っていないこともわかりました。



浅羽野に残る墜落事故で亡くなった人を弔う小祠も回りましたが、今では近隣の方々も何の小祠なのかかわからない方がほとんどかと思えます。そういった戦跡や、忘れられ、また隠蔽されてきた戦争の歴史を後世に伝えていくことは、日本がこれからも戦争しない国であるためには、非常に大事だと感じた今回の戦跡めぐりでした。(感想は次号に掲載)

## 高射砲のあった街で

12月11日に語りたいこと

中富町 徳升悦子

2015年の国勢調査では、終戦の年に5歳以上だった日本人は約1609万人で、10年前より4割程度減少していると報じています。

私もその中の一人とはいえ年齢76歳。つまり、5歳が終戦の年でした。

この10年間で戦争の実体験を語れる年齢層がそれだけ少なくなっていることに、私は焦りを覚えます。

12月の「戦争を語り継ぐ会」で私の「戦争体験」をお聞きいただくのですが、まず、戦時中の家族と私、板橋区常盤台という街の戦争との関わり、終戦の日、戦後の困窮生活などの実体験をお話し、今、戦争法が施行され、「いつか来た道」に戻るような危険な情勢であることを踏まえ、戦争の時代を過ごした私についてお伝えしたいと思います。

## 原爆投下 71年目の真実(1)

末広町 石川裕一

### 原爆投下の正当性とは

今年8月、アメリカのオバマ大統領が、現職の米大統領としては初めて広島を訪れました。しかし、彼から「謝罪」の言葉は聞かれませんでした。

1945年8月6日、アメリカが広島に原子爆弾を投下した直後、米大統領ハリー・トルーマンはラジオ演説で「戦争を早く終わらせ多くの米兵の命を救うために原爆投下を決断した」とその正当性を主張しました。これが今日に至るまでアメリカ社会で「原爆投下の正当性=大義」とされてきました。

8月6日の「原爆の日」、NHK総合テレビの「NHKスペシャル」で『決断なき原爆投下 米大統領71年目の真実』が放送されました。そこで語られていたのは、驚くべき「真実」でした。それがどんな「真実」だったのか、番組の内容を紹介しながら分かち合いたいと思います。

### 軍を止められなかった大統領

アメリカ軍原爆計画の責任者レスリー・グローブス准将は、今回見つかった未公開テープで「大統領は市民の上に原爆を落とすという軍の計画を止められなかった。いったん始められた計画を止められるわけがない」と述べています。原爆投下をめぐってトルーマン政権と軍の間で激しい攻防があったことも解ってきました。

市民の犠牲を最小限に留めたいトルーマン大統領は「目標はあくまで軍の施設に限る」としていましたが、これに対して軍は「原爆の最大の破壊効果を得るため市民の暮らす都市の中心部」を狙っていました。市民の上に落とされた2発の原爆、強烈な熱風と爆風、そして放射能に襲われ、その時だけで21万人の市民が殺されました。

## 戦争を語り継ぐ 子や孫の時代へ

日時 12月11日(日曜日)13時30分から16時

会場 坂戸駅前集会施設(2階)

内容 高射砲のあった街で 徳升悦子さん

9条への思いや話し合い、平和のうたなど

大統領の明確な決断がないまま投下された原子爆弾、何故市民の命が奪われなければならなかったのでしょうか。71年目に明らかになったその真実とは。

## 多くの命を救った原爆投下？

5月30日は、アメリカ各地で退役軍人を称えるパレードが行なわれます。オバマ大統領が広島を訪れた今年、改めて「原爆投下」が話題になりました。

「多くの日本人の命が奪われたが何千人の米兵の命が救われた。大統領の決断は正しかった」「今生きているのは原爆投下のおかげだ。戦争を早く終わらせたので、日本の子どもたちの命も救われたのだ」。

多くの命を救ったトルーマン大統領の決断は正しかったという、この大義が今でもアメリカ社会では根強く受け入れられています。しかし、この大義を根本から揺るがす事実が明らかになりました。(次号に続く)

## 【投稿】人生2回目のヒロシマで(後編)

栄 平瀬敬久

平和記念資料館に入ってまず目に留まるのは、被爆した家族の蠟人形です。この蠟人形は、これを見た小さい子ども達がショックを受けるとの理由から、広島市では来年の撤去を予定しているそうです。被爆の実相を伝えていくためにも、これらの像は撤去すべきでないと考えます。市民団体では、撤去反対の運動を行なうそうです。署名運動等何か協力できればと思います。

展示物は他に、原爆投下直後の広島の街の様子の写真やジオラマ、原爆の発した熱線や放射線の影響、黒い雨が降った範囲、放射線の影響を受けやすい粘膜や生殖器、骨髄など身体の部位、原爆の子の像で有名な佐々木禎子さんの写真や折り鶴がありました。

資料館に展示されていると聞いていたオバマ大統領が折った折り鶴はなかなか見つけることができませんでしたが、出口付近のロビーに専用のコーナーが設置されており、オバマ大統領の資料館訪問時のパネルとともに見ることができました。そのコーナーには人だかりができており、来場者の関心の高さが伺えました。

今回、資料館を訪問できたことは、私にとって長年のトラウマの克服につながったように思えました。

翌5日、翌々日6日は分科会、閉会総会に出席しました。開会総会、分科会、閉会総会ともに登壇した方が共通して言われていたのは、被爆体験の継承でした。現在、被爆者が高齢化しており、今後、被爆の実相を伝える語り部がいなくなってくる。そのため、被爆の実相を被爆2世や3世、被爆者の話しを聞いた者が伝えていく、つまり、聞き手が語り手になっていくことが今後必要…ということでした。

分科会の講師として参加した被爆者の木村緋紗子さんの発言を紹介します。木村さんは爆心地から1.6Kmのところまで8歳の時に被爆しました。父、祖父を始め8名の親族を被爆で亡くされ、現在は宮城県で被爆体験の語り部をされています。

木村さんは「この語り部の活動をしているのは、親族8名が亡くなったからではない。広島、長崎では原

爆投下から1年以内に21万人の方が亡くなった。何も知らずに亡くなった。その人たちのために頑張っている。そのため、自分は被爆後も71年間生かされてきた。あの21万人の思いを伝えたい。核兵器の威力、数は現在莫大なものになっている。今使用されたら、71年以上にもっと被害を被る。被爆した父や祖父を看病した体験を伝えたい」と語りました。

そして「ヒロシマ、ナガサキを知ることは、未来を考えること。年々被爆者も高齢化で亡くなっていく。被爆者の声を聞いて、継承してほしい。世界大会から帰ったら忘れるのではなく、地元に戻ったら皆に伝えてほしい。自分の子どもや孫に伝えてほしい。そのためにも、被爆者に寄り添ってほしい。被爆者は、聞かれたことは何でも答える」とも話されました。

6日朝の慰霊祭でも、広島市の松井市長が「被爆者の平均年齢は80歳を越え、自らの体験を生で語る時間は少なくなっています。未来に向けて被爆者の思いや言葉を伝え、広めていくには、若い世代の皆さんの力も必要です」と同様の話しをされていました。

世界大会の1週間後、九条の会さかどの「戦争を語り継ぐ会」にも初めて参加し、ここでも「聞いた者が伝えていく」ことがいかに大切かと改めて感じました。

この世界大会に参加して、私は修学旅行のトラウマを克服できました。そして、それだけではなく、今回見たこと、聞いたことを、少しでも多くの方々に話し手として伝えていかねば…との思いに駆られています。

これらの思いについては、今回の投稿で書き尽くせるものではなく、次の機会にまたご紹介できればと思っています。お読みくださった皆さま、本当にありがとうございました。

## 九条の会が世話人会

2004年6月、日本の各界を代表する9人によって「九条の会」が発足しました。「九条の会」のアピールに応え、2005年5月、九条の会さかどもスタートしました。

9人で始まった「九条の会」ですが、今では3人となり、「よびかけ人を支え、九条の会の在り方などを論議するために新たに世話人会を発足させること」が、「九条の会」事務局から発表されました。

世話人会のメンバーとなった12人を紹介します。

- 愛敬浩二(名古屋大教授、憲法学)、浅倉むつ子(早稲田大教授、労働法)、池内 了(名古屋大名誉教授、宇宙物理学)、池田香代子(ドイツ文学翻訳家)、伊藤千尋(元朝日新聞記者)、伊藤 真(日弁連憲法問題委員会副委員長)、内橋克人(経済評論家)、清水雅彦(日本体育大教授、憲法学)、高遠菜穂子(ボランティア活動家)、高良鉄美(琉球大教授、憲法学)、田中優子(法政大総長、江戸文化研究家)、山内敏弘(一橋大名誉教授、憲法学)

## 今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

11月24日、12月22日、1月26日(第4木曜日10時~12時)北坂戸駅東口を背にして、駅前ロータリーの正面左側、北坂戸にぎわいサロン(坂戸市と城西大学との連携)で。